



国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

2012. 3  
No.15

# テキスト布置の解釈学的研究と教育

## CONTENTS

- 巻頭言 グローバルCOEプログラムを終えるにあたっての所感 ..... 02  
〈テキスト布置の解釈学〉の五年間を振り返って／プログラム事業終了にあたって ..... 03
- 大学院学生海外派遣事業調査報告 ..... 04
- 名古屋大学レクチャー 2012 公開講演会 ..... 05
- グローバルCOE国際研究集会 ..... 06
- 教育プログラム 2011年度講義科目の紹介 ..... 07
- 研究活動 グローバルCOEワークショップ ..... 12  
グローバルCOE講演会 ..... 12  
オープン・レクチャー ..... 13  
グローバルCOE研究員ブリーフィング ..... 14  
海外出張報告 ..... 14
- グローバルCOE活動成果一覧 ..... 15



## グローバルCOEプログラムを終えるにあたっての所感



### 佐藤 彰一

●拠点リーダー

査査委員を相手にした競争資金獲得プロジェクトに臨んだのは、今にして思えば「蛮勇」であった。おそらく旧プログラムの21世紀COE「統合テキスト科学の構築」が垣間見させてくれた、新たな人文科学的地平の豊穡さへの期待と興奮が、余熱となって私どもの内奥にとどまり、研究推進担当者の魂に絶えず放射し続けていたからであったからに相違ない。これほどに大胆で先端的なプログラムは国際的にも稀である。そのことは、文学、歴史、哲学、言語学の海外の一流の専門家によって実施された、中間評価と最終評価の報告書から充分うかがうことができる。これは自画自賛との誹りを免れないかも知れない。さもあらばあれ。報告書の措辞のうちに、欧米の一流の学者の真の感嘆の思いも、目利きには読みとれるはずである。なぜ近代的なテキスト研究の伝統を持たないはずの日本から、これほど先端的な着想の人文科学が現れたのか、との戸惑いさえうかがえる。

私どもはこのプロジェクトにあたって、二本の柱を立てた。ひとつはフランスの文学、テキスト理論。もう一本はドイツの聖書解釈学を揺籃とし、やがてハイデガーを経て、H. G. ガダマーによって人文科学の一般理論と融和的な形に仕立て上げられた解釈学である。その理論構築には、研究担当サブ・リーダーを務めた松澤和宏教授の貢献が大きい。この指向的枠組を受け入れ、これを通り過ぎた探究者は、もはや言葉の分節によって作られたテキストを、書き手の思考の素朴な発露と受け取ることはできない。所与の

テキストの背後には、そしてテキスト作成行為の背後には、まさしく夜空を彩る満天の星がつくりだす星座のように、吸引力と磁性を帯びた夥しい数のテキスト構成要因が「布置」として明滅し、書き手を誘っている。そのことに無頓着な人文科学の学徒は、もはや学問的革新に一縷の望みさえももてないだろう。

他方で、このプログラムが研究とおなじほど教育に重点をおくことを忘れていたわけではない。教育担当サブ・リーダー釘貫亨教授のもと幾つもの新たなテキスト布置解釈学関連の講義新設し、英語による授業も実施した。その幾つかはプログラム終了後も継続される予定である。

5年の間に計13回の国際研究集会が開かれたが、内外の一流の専門家に報告を引き受けてもらい、その成果は速やかに出版された。名古屋の印刷出版社「あるむ」はその優れた多言語テキストの編集能力と、簡素ながら美しいレイアウトの造本を心がけてくれた。ニュース・レターの発行とあわせて感謝したい。加えて国際的に著名な出版社であるシュプリンガー社、ピーター・ラング社や、著名な大学出版局であるMITプレス、ストラスブール大学出版局からも成果の刊行ができたことに大きな満足感を覚えている。

これら細心の予算措置が必要な企画とその円滑な遂行には、重見晋也准教授の驚くべき問題解決能力に負うところ多大である。専門の電子テキスト論での寄与とあわせて、その活躍はまことに頼もしく心強かった。プログラムの終了を期に惜しくもフランスへ帰国されるクレール・フォヴェルグ准教授には、短い文章では書き尽くせないほど多くのご支援をいただいた。本国のみならず国際学界での一層のご活躍を期待したい。

野田ゆかりさん、安井詩歩さん、水本早奈美さんの3名の事務担当の皆さんは、万般にわたり、事業の運営の欠くべからざる潤滑油になっていただいた。一人ひとり名前を挙げることは控えるが、平野克典博士を初めとするグローバルCOE研究員の皆さんにとり、このプログラムへの参画が、学問的に羽搏くための跳躍台になり得たことを衷心より願っている。最後になったが大学当局の財政的支援に感謝申し上げる。

## 『テキスト布置の解釈学』の

五年間を振り返って

●研究担当サブリクター  
松澤和宏



〈テキスト布置〉の骨子は、拙著『生成論の探究』（2003年）のなかで、フランスのテキスト論を参考にして提示したものであったが、フォルマリズムが考察の対象から除外した前テキスト、作者、読者、コンテキストを組み込んで考察しようと努めたものである。このテキスト布置の考えは、人文学におけるテキストへの方法的アプローチの素描ではあるが、それによって解釈が自ずと導き出されるような方法論でも理論体系でもない。

ガダマーの〈解釈学的経験〉という考えの裡にフランス系テキスト論の方法論偏重を超えるものがあると気づいたのは、『生成論の探究』の執筆中であった。21世紀COE「統合テキスト科学の構築」にも、方法論や一般理論の体系化への過度な期待がつきまわっていたように思われる。幸いテキスト布置の解釈学がグローバルCOEプログラムとして採択され、私は方法論主義批判という難題を抱えながら、プログラムの実施に関わるようになった。『バルザック、フローベール——作品の生成と解釈の問題』やバリで催された『知のテキスト化』では、フランスの研究者と時に激しい議論を交わし、『言葉に向かう日本の学知』では、時枝誠記とソシュールに解釈学の問題意識という点で相通じるものがあること

を示した。また『哲学的解釈学からテキスト解釈学へ』では、ガダマー研究の第一人者のグロンダン教授の前で、テキストの二重性をめぐってささやかなガダマー批判を開陳して、有意義な意見交換ができたことなどが、個人的には懐かしく思い起こされる。

ガダマーの解釈学は主体と客体を分離する方法論主義を批判しながら、歴史的有限性を刻印された人間が、世界と自己の理解を求めて遭遇する解釈学的経験を、テキスト解釈の礎石に据えて人文学を再興しようとするものであった。解釈学的経験の核心は、方法論的对象認識ではなく、問いと答えの対話的弁証法による理解の深化にある。ある方法や理論を松明としてテキスト解釈を進める場合でも、状況に応じてその松明を消し、別の枝を折ってそれを松明としてテキストの森のなかを、対話を試みながら歩き続ける覚悟が必要である。テキストの解釈は、先人の手によって伝承されてきた価値を現在の継承していく営みであり、伝承に参与していく主体的実践なのである。各自がみずからの領域でテキスト解釈と自覚的に取り組んだ五年間にわたる活動も、そうした解釈学的実践であったことを確認して、プログラムが蒔いた種が今後様々な形で実を結んでいくことを期待したいと思う。なお研究グループの現在の到達点については、『テキストの解釈学』（水声社）を参照していただければありがたい。

## プログラム事業終了にあたって

●教育担当サブリクター  
釘貫亨

グローバルCOEプログラムが終わる。個人的には先行プログラムの21世紀COE以来、10年間これとかわった。前半5年は研究プログラム、後半は教育プログラムという違いがあったが、何れにせよ自分の研究の維持と向上が死活的に重要であると腹を据えてきた。幸いであったのは、私の近世仮名遣い論研究と近現代日本語学説史が「テキスト布置の解釈学」という看板に対して違和感が無かったことである。というのは、鎌倉時代から明治前半期までの日本語学史が古典語テキスト解釈学というべき性格を備えているからである。古典古代語は、私の歴史言語学の領域でもある。今までのところは、近世の仮名遣い論書、テニヲハ学書や近現代の国語研究の高峰をたどるのに精一杯であった。しかし、これらの書に付随する同時代の注釈が広い裾野を覆うテキストの森となって解明の時を待っている。テキスト注釈の精髓として仮名遣い論書やテニヲハ書が書かれ、次いでそれらをテキストとする注釈が書かれるという解釈学の重層構造の学説史

は、いま緒に就いたばかりである。緒に就いたばかりでプログラムが終了するのは残念だが、見えたのは個人の能力を超える遠大な展望であった。遠大な展望を得たところでプログラムを終了できるのは幸いである。

本プログラムは博士課程の教育目標を掲げているのであるが、高等教育機関への効果的な就職を着実に実現することができた。アカデミーへの就職の困難な昨今の状況から見てこの成果は誇らしい。このことは、人文諸学の領域を横断して諸分野の博士課程の俊秀を集約して教育することの有効性を示している。本プログラムが優秀な大学院生にチャンスを与えたことは疑いない。名古屋大学の文系部局の規模から考えると、研究室選りすぐりの人材を集約的に教育する構想を模索する必要もある。本プログラムがそれに向けての水先案内の役割を果たせたとすれば、これも目標に合う成果であろう。





## 2011年度 大学院学生海外派遣事業調査報告 第1回

グローバルCOEでは、「大学院学生海外派遣事業」の募集を年2回行い、博士課程後期課程の学生に対して、課程博士論文の執筆に必要な海外での調査を支援してきました。募集に際しては博士論文執筆計画および海外調査計画の提出を求め、グローバルCOE学術委員会の下に設けられた選考委員会で応募書類を審査し、さらに面接を実施して支援する海外調査を決定してきました。2011年度の第1回目の募集で採用した百草さんの報告書を以下に掲載します。

### イザベッラ・デステのストゥディオー口装飾に関する現地調査

イギリス・イタリア

百草真理子 ● 文学研究科 美学美術史学 博士課程後期課程2年

2012年1月4日から18日にかけてイギリスとイタリアを訪れ、ルネサンス期の画家コレッジョの対作品《美德の寓意》と《悪徳の寓意》(1530年頃、ルーヴル美術館所蔵)の意味解釈に関わる文献資料や図像の調査を行った。本作品は、マントヴァ侯爵夫人イザベッラ・デステにより、彼女のストゥディオーロ(小書齋)に設置するために注文されたもので、他の5点の絵画とともに、この空間に求められた機能を視覚化していたと考えられ、16世紀初頭の宮廷の建築構造と室内装飾の関係を知るうえで重要な作品である。

マントヴァ宮廷の人文主義者のもと構想され難解な意味をもつ本作品は、現在までの研究でその主題について十分に理解されているわけではなく、また、文学的典拠との関連や、建築空間との結びつき、さらに、コレッジョの様式展開における位置付けなど、考察すべき問題が多々残されている。こうした課題を踏まえ、博士學位論文執筆に際しては、イザベッラの宮廷やストゥディオーロというコンテ



ウォーバーグ研究所

クストのもとに解釈を試み、書齋の観想空間を形成するためにこの二作品が果たした役割を明らかにすることを目指している。

今回の調査では、先行研究で未解決の図像に焦点を当て、全体の主題内容との関わりを検討することを目的



《美德の寓意》と《悪徳の寓意》

とした。派遣先であったロンドン大学附属ウォーバーグ研究所(The Warburg Institute)には、古代から19世紀に至るまでに制作された彫刻、絵画、版画、タペストリーなど、約300,000点のイメージを撮影した写真が収集され、それらが約18,000の主題別に分類されている。本研究所では、コレッジョ作品と関連性の高い主題やモチーフを表した伝統的な図像との比較対照を通じて、作品解釈の方向性を考えるうえで有益な情報を得られた。また、フィレンツェ国立中央図書館(Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze)においては、典拠の一つと推測されるマリオ・エクイコラの『愛の本性』(1525年)に関わる著作を閲覧し、当時の文学的状況の一端を窺うことができたほか、近年の論考にあたり、最新の研究動向を知るための文献の収集を行った。加えて、フィレンツェでは、イザベッラよりやや時代の下る、フランチェスコ・デ・メディチのヴェッキオ宮殿内の書齋を実見し、この空間を育てていった当時の人文主義的な営みを垣間見ることができたのも大きな収穫であった。今後は、調査を通じて得られた知見と情報に基づいて、場とイメージの関係性へと進展させていけるよう考察を深めていきたい。

NAGOYA UNIVERSITY LECTURE  
名古屋大学レクチャー 2012 | 公開講演会

## 日本文学と日本文化をめぐって語る

2月21日（土）名古屋大学豊田講堂において2012年名古屋大学レクチャーが本プログラムとの共催で行われた。今回は、日本文学研究のドナルド・キーン氏（コロンビア大学名誉教授）と日本演劇研究の鳥越文蔵氏（早稲田大学名誉教授、早大演劇博物館顧問）を招き、「日本文学と日本文化をめぐって語る」と題する公開講演会を開催した。前半は鳥越教授の「日本文化における芸能」と題する講演で、近世上方歌舞伎研究の権威としての立場から近松門左衛門『曾根崎心中』における商家の手代の徳兵衛と北新地の遊女お初



の情死から劇を起こした近松がアリストテレス的悲劇を超える世界を創出したと再評価したキーン氏のテキスト解釈の意義と当演目の復活に寄与したキーン氏の学業を平易な言葉で顕揚した。また幕末明治維新时期における伝統演劇の危機に際して河竹黙阿弥が果たした役割をキーン氏の世界演劇の視点からの評価と合わせて解説した。

後半がキーン氏による「世界の中の日本文学」と題するレクチャーであった。キーン氏によれば、日本文学が古代から存在したことは明らかだが、それを最初に認識したのは8世紀に成立した『日本書紀』所載の歌謡を目にした中国人であった。次いで16世紀に日

本にキリスト教を布教しようとしたイエズス会宣教師が日本語学習の教材として選んだ『平家物語』をカトリック修道僧に紹介した。キリスト教禁教後の長い鎖国を経て日本文学が世界に知られるようになったのが幕末明治期にかけてジャポニズムの流行に伴ってフランス人が日本文学に注目し、それを継いだ英国人が『源氏物語』の英訳に成功し、世界を驚かせるに至るまでの苦闘を論じた。

現在では、多くの古典文学を始め現代の日本文学が盛んに翻訳され、世界の中で確実に存在感を増していると締めくくった。



濱口道成名古屋大学総長よりキーン氏に名古屋大学レクチャーシップが授与された。

本プログラム拠点リーダー佐藤彰一文学研究科特任教授がレクチャーの総括に際して両教授の講演を敷衍するとともに日本文学と日本文化を世界的視点から考え直す優れた機会であったと締めくくった。本レクチャーは、新聞発表と同時に受講者申し込みが殺到し、主催者は抽選を余儀なくされるほどの盛況ぶり、参加者は豊田講堂の収容人数を満す1200人であった（中日新聞）。5年目を迎えた本プログラムの掉尾を飾る盛会であった。

関係各位のご協力に感謝いたします。

文責：釘貫 亨（グローバルCOE事業推進担当者）





## 哲学的解釈学からテキスト解釈学へ

### De l'herméneutique philosophique à l'herméneutique du texte

2011年12月9日(金)～11日(日)

名古屋大学文系総合館カンファレンスホール  
および 法学部棟906号室

第13回国際研究集会「哲学的解釈学からテキスト解釈学へ」が、2名の外国人研究者を招いて、12月9日から3日間にわたって文系総合館カンファレンスホールにて催された。まず最初に羽賀祥二文学研究科長から挨拶があり、ついで佐藤彰一拠点リーダーより開会の辞が述べられた。その後、組織責任者の松澤和宏教授より趣旨説明があった。ハイデggerにおいて存在論として深化された哲学的解釈学を継承しながら、テキスト解釈の問題を重視したガダマーの『真理と方法』の地平を踏まえながら、フランスで展開されたテキスト論の諸成果を批判的に摂取することで、テキスト布置の解釈学の骨子を提示し、解釈学としての人文学への展望が示された。野家啓一教授（東北大学）は科学哲学の領域においても解釈学の有効性が認められ、アングロ・サクソン系と大陸系の異なる流派の地平の融合が準備されてきた経緯を明快に説かれた。佐々木一也教授（立教大学）は、地平の融合というガダマー哲学の核心をなすテーマについて批判的に掘り下げ、異なる文化圏の間の相互理解に伴う問題に光をあてた。ガダマー研究の第一人者ジャン・グロンダン教授（モンリオール大学）は、テキストを自律した対象としてではなく、あくまでも人間主体の解釈学的経験の場として捉え、解釈行為における問

いと答えの弁証法の過程を解明した。松澤和宏教授は、ソシュールにおける言語の科学の探究が解釈学的循環を引きおこして時間の問題に遭遇するに至る過程が草稿に即して明らかにされた。金山弥平教授は、プラトンにおいて書かれたテキストがどのように考えられていたかという重要な



問題について示唆に富む発表を行った。文学的解釈学の権威であるピエール・グロード教授（パリ第4ソルボンヌ大学）はバルバー・ドールヴィイの「罪のなかの幸福」を例に寓話的解釈を示して、解釈学の魅力と射程を聴衆にフォーヴェルグ特任准教授はライプニッツとガダマーの関係を観点や地平の概念に着目して相互の関係を論じた。真野倫平准教授（南山大学）は晩年のミシュレにおける歴史哲学の興味深い変化について、鎌田隆行准教授（信州大学）はバルザックを例に取りながら生成批評が次第に解釈学的な問題圏に接近していることを示した。また11日午前には並行して法学研究科の森際康友教授、長谷部恭男教授（東京大学）、アンドレイ・マルマー教授（南カルフォルニア大学）、濱真一郎教授（同志社大学）によって法テキストの解釈をめぐる講演・研究報告がなされ、午後には人文学者と法学者との間で、予定時間を超えて続くほど、テキスト解釈学をめぐる白熱した議論が交わされた。国際シンポジウムにふさわしく、英語、フランス語、日本語で、実り豊かな解釈学的な対話を実現されたといえよう。

文責：松澤和宏（グローバル COE 研究担当サブリーダー）





## 講義科目の紹介

2008年度に大学院博士後期課程に入学した大学院生からは、課程博士論文を執筆して学位を取得するために、グローバルCOEが開講する授業科目から「テキスト布置解釈学原論」と「テキスト布置解釈学各論」を各2単位修得することが必要です。またこれらの授業への登録はグローバルCOE論文賞および大学院学生海外派遣事業に応募する際の条件になっています。2008年度より前に大学院博士後期課程に入学した方についても、グローバルCOE授業科目に登録し履修していることが、前述した二つの事業に応募する際の条件となっています。これらの授業科目はプログラム終了後も引き続き開講されます。

### テキスト布置解釈学原論 [後期]

松澤和宏 教授 (フランス文学)

2011年12月27日(火)・2012年1月5日(火)・6日(水)・10日(火)

今年度の講義では、まず最初に、テキスト布置の解釈学の概要について紹介した。テキスト解釈が、テキストとの対話を通して歴史的伝承に参加していく実践的な経験であること、そしてテキストが布置関係の結節点としてあること、テキストも解釈者も歴史的コンテキストを背負っていることなどを検討した。第二に、テキスト布置の解釈学の具体例として、バルベール・ドールヴィイの『罪の中の幸福』の解釈学的読解を試み、この小説が三つの水準で解釈できることが判明した。第三に、文化理解の特殊性について考

察し、文化的事象が持っている有機的な連関を内側から把握しようと努める解釈学的理解の特質を考察した。最後に、ガダマー『真理と方法』の未邦訳の第三部をドイツ語原文、および英語訳、フランス語訳で読み進め、理解が他者と一体化を目指すものではなく、〈共通のもの〉を見出す営みであるとするガダマーの所説を吟味検討した。熱心な受講者のおかげで、終始活発な質疑応答や意見交換が行われ、有意義な講義となった。

### テキスト布置解釈学各論

#### 各論 I

大石和欣 ● My lectures reviewed hermeneutics in the field of literature, in particular, in the literature of eighteenth- and nineteenth-century Britain. Since the emergence of post-modern criticism, various hermeneutic interpretations have been presented to the studies of English literature in the period. My first lecture mapped out the general outline of hermeneutic literary criticism, starting with Biblical interpretations and leading up to Jacques Derrida and Hans-Georg Gadamer. A special emphasis was laid upon how these hermeneutic theories emerged in modern European philosophy, in particular, in the writings of Friedrich D. E. Schleiermacher. I then moved on to explore how these theories have been applied to interpretations of English Romantic Literature for the past forty years.

A few interesting model cases of hermeneutic literary interpretations were discussed in my subsequent lectures. My second lecture excavated the muddled responses in Britain to the outbreak of the French Revolution. Richard Price's view of the revolution as a repetition of the 1688 Glorious Revolution in Britain provoked a furious criticism of Edmund Burke, who saw it as a dangerous threat to socio-political and socio-economical order under the monarchical system. Their dispute was followed by more than ninety attacks and counter-attacks between radicals and pro-Burkean anti-Jacobins. The controversy was concerned not only with interpretations of

the political incident in France, but also with interpretations of political discourses on the basis of variegated views on the revolution. I attempted to show how the hermeneutic theory can be applied to examine these seemingly chaotic discourses on the French Revolution.

My third lecture took up parodies in the Romantic age. In the 1980s, Gérard Genette showed the mode and significance of parodies from a post-modern viewpoint. I suggested that parodies encompass not merely rhetorical and discursive distortions of the original text, but also political satires and social critiques of the original text, which the readers are expected to unravel and enjoy on their own footings. The hermeneutic circle can be considered as the essential feature of such interpretations of parodies both among the contemporary readers and among the readers in different periods. Taking up some examples including parodies of William Wordsworth's poems, the lecture observed that people have read different messages and meanings at a different time of history and in a different cultural context.

My final lecture was supposed to discuss—but it did not take place because of students' absence—how senses of history were created through hermeneutic interpretations of the French Revolution. I was planning to focus on the reportages by Helen Maria Williams, a dissenting female writer who migrated

to France in 1790. From 1791 until her death in 1827, she continued to offer people in Britain eye-witness accounts of the ongoing process of the Revolution and its aftermath. Through her discourses, she kept revising her initial idealistic view on the revolution and repositioning herself in the ever-changing

political milieu. Her serial *Letters from France*, in particular, are products of her ceaseless and unsuccessful attempts to review and reinterpret historical meanings of the Revolution. They thereby provide an interesting case of a hermeneutic interpretation in the literary context.



### 佐藤彰一 ● Hermeneutics and Time in the Text of History: Reinhart Koselleck (1923–2006)

The discontinuous image of time in history invalidates an explanation of events through cause-and-effect relationships and also neutralizes the idea of historical inevitability. That idea of the discontinuity of time received an enthusiastic support from French historians and in particular to specialists in contemporary history, thanks to a contribution by Reinhart Koselleck. I would simply mention here that the fundamental nature of the discontinuity of time must be deduced from a discussion of the scale of historical analysis.

Modern or contemporary history is more appropriate to the execution of a thick account of an event because of the huge documentation available for inquiries. Contemporary history, or what the French call “*present history*”, has the virtue of specifically asking the epistemological question “*what is event?*”, by working in great detail. It is this field where one could profitably inquire into an event from the perspective of the hermeneutics of the text. It was German historian Reinhart Koselleck who got to the heart of this problem, and so doing, influenced French historians.

In his article *Theory of History and Hermeneutics*, he examines the question of what kind of relationship hermeneutics establishes with time. Without the element of time, all understandings do not know in what way they should be expressed. An understanding of the text or what is understood relates to its meaning—as an existential enterprise executed by human beings—; all of the acts of understanding are essentially tied to time”. Thus, the interest that he took in hermeneutics was most essential. As for semantic inquiry in the events of history, Koselleck’s *Vergangene zukunfts. Zur Semantik geschichtlicher Zeiten* (1979) has attracted the most discussion. Among the articles contained in it, his *Space of experience and horizon of expectation: Two historical categories* produced a massive response among intellectuals in Europe

and throughout the world.

In this essay, he stresses the methodological importance for historians of distinguishing between concept and category in the praxis of textual interpretation. For instance, “war”, “peace”, “force of production”, “mode of production”, “antique slavery”, and “Reformation” belong to concept and it would not be difficult to find corresponding terms in historical texts. However, Koselleck’s *space of experience* or *horizon of expectation* belongs to the cognitive category that is placed above the concept. One cannot directly deduce these meta-categories from the terms that find in texts. For instance, the concept “war”, can be refined by way of defining more precisely what should be excluded as being part of the counter-concept “peace.” Thus, we are able to determine more exactly a semantic scope. We can do the same for the concept “labor”, by comparing it to the counter-concept “leisure”. On the contrary, a meta-historical and cognitive category, —*space of experience, horizon of expectation*—, does not permit such a procedure. Koselleck derived his epistemological position from the study of the history of concepts. Inquiring into the German term “*Geschichte* (=History)”, he recognized that its eighteenth century user referred to something “taking place”. He noticed a phrase used by the German poet Novalis *Heinrich von Ofterdingen*: “... observe the covert inter-linking of the before and after, and learn how to compose history from hope and memory.” This conception of “*Geschichte*” thus essentially lacks in meaning a consideration of the “past” that the word would be soaked semantically with what we sense now. Instead it implies a covert inter-linking of what is taking place as something that is passing away, to the future. It is what Koselleck wished to stress that one could think of a relationship to the past or the future, only after one has learned to construct a history from the modalities of memory and hope.



### 古尾谷知浩 ● 人文科学とテキスト布置研究——壘田永年私財法をめぐって

本講義では、壘田永年私財法を題材に、古代の法制史料を、現代の研究者が、史料の布置構造の中で、どのように解釈してきたのかという問題を検討した。

10月17日・24日は、中国における律令法制定の歴史、および、これを継受した日本の律令法制定・格式制定の歴

史を概観し、法制史料の布置を解説した。

10月31日は、まず、複数の高等学校日本史教科書を取り上げ、壘田永年私財法の解釈が、依拠した研究史の段階に応じて、違いが見られることを確認した。壘田永年私財法は、かつての研究では、律令制崩壊過程の一環に位置づ

けられてきたが、吉田孝氏の研究を画期として、近年は律令国家の支配の進展という歴史の中で理解することが有力となってきている。この研究史の動きを整理し、かかる解釈の転換は、中国律令法と日本律令法との比較研究が深まったことから生まれてきたものであったということを解説した。

11月14日は、墾田永年私財法が律令国家支配の深化に伴うものであったという解釈が、より妥当であるというこ

とを示すため、この法の実行を可能ならしめた制度としての田籍・田図の問題を解説し、また、法を実行した結果としての不動穀の蓄積の問題を論じた。

最後に、研究史の中で墾田永年私財法をはじめとする法制史料の解釈が転換した背景に、中国律令法から日本律令法への継受過程における、法制史料の布置構造についての理解が深まったことがあるということを述べて、総括とした。

### クレール・フォヴェルグ ● 『百科全書』のテキスト布置

『百科全書』は二つの異なる布置を、すなわち事典の布置と百科全書の布置とを含んでいます。『科学、芸術、技術の理論的事典』としての『百科全書』は、アルファベット順を用いて、語彙に加えて科学と技術それぞれの一般原理とそれらの詳細を記述しています。また『百科全書』としては、人間知識の一貫性を示しています。この一貫性は、『百科全書』の本文において主に参照の体系として示されています。『百科全書』のテキストのレベルにおいて、諸科学間の連係や項目間および項目の内容間との関係を保証しているのはこの参照なのです。

しかしながら、参照によって出来上がる布置は直接目に見えません。この点において参照による布置は、『百科全書』の冒頭に掲載されてパラテキスト的装置をなしている「人間知識の系統図」とは異なります。というのも、「人間

知識の系統図」は、人間知識の全体像を読者に提供しますが、知識に対するただ一つの観点しか示していないからです。そのために、『百科全書』の編集者は、既に「趣意書」の段階からその観点の恣意性を強調していたのです。

したがって、『百科全書』の編集者は、参照によって示される『百科全書』の布置が項目の読解を通じて浮き彫りになることを期待しています。この布置は省略や不備を含んでいますが、それらを補うのは読解でしかありえません。その上、『百科全書』はメタテキストの全ての特徴を示しているため、メタテキストとして読まれなければなりません。その結果、項目のテキストは、現象の連なりをたどることも観念の厳格な脈絡に従うこともできていないのです。そうであってなお、『百科全書』のテキストに参照が導入されるのは、『百科全書』の根底にある諸科学の一般分類の恣意性を読解によって補わせるためなのです。

**重見晋也** ● 百科全書派の示した知の分類の可能性には、知の横溢という主題が前提として存在していた。この同じ主題を20世紀のハイパーテキストの創設者たちも共有していたことを、ヴァネヴァー・ブッシュの論文「As We May Think」(1945)で確認することができる。ブッシュはこの主題に対する具体的な解決策として、従来のインデクスを使った知の分類から知の連関あるいは関係性を保存・検索するような新たな仕組みを採用した機器の開発を提案する。このテキスト自体ではなく関係性の全体を重視する考え方は、百科全書派の系譜に属する理念だと考えることもできるだろう。

テキスト自体ではなく、テキスト間の関係性を重視するという観点は、フランスの批評家ジェラルド・ジュネットが『パランプセスト』(1982)の冒頭において提示した「超テキスト性」の考え方でもあった。ジュネットが主張する概念では、本来的にはメタ・テキストやパラ・テキストといったような個別のテキストの性質ではなく、テキスト間を結ぶ関係性である。

このようにテキスト間の関係性を「布置」としてとらえるのであれば、ミシェル・フーコーが『知の考古学』(1969)で提示した「言説」概念もまた、「言表」を対象・様態・概念・戦術という4つの審級それぞれにおいて発動するフォーメーション・ルールによって統一性が保証された、一つの全体としての知という「布置」として考えられている。フーコーが提示するこの布置は、中心をもたずお互いの関係性の記述によって絶えず分散していく全体として提示される。

このように「布置」とは個々のテキストによって構成されるものとしてとらえるのではなく、テキスト間の関係性によって構築される全体であるが、ジュネットにせよフーコーにせよその性質は静的で変化が生じる余地のない一つの全体として想定されている。しかし、解釈者によって解釈が変化するのであれば、「布置」もまた動的に変化する可能性をもたねばならないのであり、ここにこそ解釈学とテキスト布置とを結ぶ次元が現れてくるのである。

## 各論

## III

**釘貫 亨** ● 日本語研究は、院政鎌倉時代に古今和歌集を中心とする平仮名で記された平安王朝文芸に対するテキスト解釈学として始まった。その語学的認識の集約点に「仮名遣い」(藤原定家『下官集』)と「テニヲハ」(『手爾葉大概抄』)が位置した。以後、この認識は中世歌学の解釈技術におけるあたかも車の両輪として持続的に伝授された。近世18世紀以後、日本古典学の担い手が広域化と大衆化を実現して、公家や上流武家中心の秘儀伝授の体質と軋轢を生じた。契沖は、自身の万葉集注釈から上代語に規範を置く実証的な仮名遣い論著『和字正濫鈔』(1695)を上梓して定家仮名遣いの無典拠の実態を暴露した。契沖の仮名遣い論を継承した本居宣長は『字音仮字用格』(1776)で上代日本漢字音を復元することを通じて上代日本語音声を再建した。また宣長は、複雑な現象を呈するテニヲハを係り結びとして直観的に認識し、これを一覧表に示し(『てにをは紐鏡』1771)、さらに実証的に裏付けた(『詞の玉緒』

1779)。これら近世期の仮名遣い論とテニヲハ論は、明治政府による公文書行政の直接的参照学説となった。18世紀の語学的研究には、このほか蘭学文典が学ばれ、明治初めころの国語教科書に蘭学文法の枠組みが初めて国文法に採用された、以後国文法教科書は、洋学系と国学系に振幅しながら、明治17年に刊行が始まった近代辞書である大槻文彦『言海』付録「語学指南」に結実した。大槻の論は、洋学と国学の業績を適切に折衷したわが国最初の近代的文法論と高く評価されている。以後の近代日本文法学は、大槻を起点として展開してゆく。大槻を継ぐ山田孝雄は、生きた言語場における伝達成立の根拠に注目し、語や文の定義に際して、カント『純粹理性批判』(1781)におけるモノの認識のあり方を問う「超越論的統覚」の概念を借りて文が成立するところ「統覚作用」が介入するという独自の統語論的根拠を提案した。



**加納 修** ● 本授業では、6世紀初頭にフランク王国で成立した『サリカ法典』がその後どのように受容され解釈されたかを辿ることで、このテキストに価値が認められることになる歴史的なコンテキストを明確にするよう努めた。一般に『サリカ法典』は、フランク時代のあいだは法規範として実効性を有していなかったとみなされている。ただし、6世紀のあいだに付された序文が、法典本文に権威を与えようとしている限りにおいて、それを規範の地位にまで高めようとする動きがあったことは認められる。

奇妙にも、この法典のある規定(59章)が規範としての地位を獲得するのは、14世紀以降フランス王国におい

て、まさしくこの規定に基づいて「男性の王から生まれた男性しか王位を継承できない」という原則が確立されてからである。その背景には百年戦争という政治的コンテキストや、封建法研究の高まりなどがあった。この原則は近世に入っても維持されるが、同時に『サリカ法典』は民族の過去を探る研究の中で取り上げられるようになる。19世紀に入ると、『サリカ法典』研究は国民国家的な解釈と結びつき、フランスでは概してその評価が低下するのに対して、ゲルマン人を祖先と考えていたドイツではゲルマン法の体系的な研究が進められ、『サリカ法典』研究は少なくともナチス時代が終わるまで重要であり続けた。



## 各論

## VI

**ブライアン・カレン** 名古屋工業大学准教授 ● From Life Experience to Discourse Community

Graduate students often have considerable life experience that they can share with other students and thus help to begin to create a learning community that can foster their ability to participate actively in discipline-relevant discourse communities in the future. For example, in this course, one student was able to share his experiences of living and researching in Ethiopia, and another student was able to introduce her experiences of living in Germany. Both of these interchanges helped to both create rapport between the students and teacher, and also to let the students realize that their own contributions can be valuable in the academic context.

In order to scaffold these life experiences into useful academic learning projects, the course involved considerable development of presentation and writing skills suitable for academia.

The chosen textbook was “Academic Writing for Graduate Students” by John M. Swales and Christine B. Feak, both highly respected experts in the field of academic writing. While the textbook as not specifically aimed at non-native speakers of English, the authors’ long experience in the field of English for Academic Purposes was well demonstrated in the book by their clear examples and careful scaffolding of language that is useful for both the native speaker and the non-native speaker reader.

The course followed a task-based methodology in achieving the following goals:

- Understanding the intended audience, the purpose of the paper, and academic genres.
- Engaging in analytic group discussion
- Genre consciousness-raising
- Writing summaries and critiques

- Language focus sections that address linguistic elements as they affect the wider rhetorical objectives
- Help students position themselves as junior scholars in their academic communities
- Develop goal-setting skills
- Provide a rationale and a forum for writing academic papers
- Develop presentation skills
- Develop the abilities required to function competently at an introductory level of a discourse community

The end of semester project involved writing a 5,000 word paper related to the theme of the students' own PhD research, and to present the same research in the form of an academic presentation. The students were able to successfully complete this challenging task, and it allowed them to explore

their own research in an unthreatening environment. Students chose to utilize this assignment in a number of ways. The students reported that the assignment helped them to focus their thoughts greatly and to make considerable progress in their overall research projects.

In addition to the writing assignments and exercises, the students also engaged in presentations and goal-setting exercises. During the semester, each student had several chances to make a presentation, culminating in the final presentation on the same topic as their paper.

Through successful completion of these activities, it was clear that the students were making the important transition from life experience to active participation in real discourse communities in their area of specialization.

## テキスト布置解釈学概論

### クレール・フォヴェルグ ■

本授業の目標は、本文としてのテキストとその異文を考察して、両者を対象にする解釈を解釈学的な観点から検討することでした。読者かつ解釈者に伝わるあらゆるテキストはある種の布置の中に位置していて、そのテキストの布置を認識しなければテキストの概念を定義できないでしょう。ところが、原文または作者自身による本文が、写しや版数の多さによって、また注釈と説明によって見えなくなることはよくあることです。百科全書的な観点から見れば、実際に読まれているテキストの異文を元にして、元来のテキストの意味を解釈することは読者の役目です。

しかしながら、テキストの解釈と理解はテキストが提示される形態とテキストに認められることになる権威に依存します。その上、テキストの機能自体は、時代や学問分野によって異なります。文字というのは最初に記憶として認識されます。『百科全書』においては記憶の機能に、さらに伝達の機能が加えられます。その機能は、確かに知識を伝えることですが、読者の判断力を磨くところも大事なのです。なぜなら、啓蒙思想はこのように伝わって行くからです。

したがって、テキストを観念の伝達という理念に従わせることになり、またその理念は、文字通りの意味でいうコンテクスト、いわばテキストのコンテクストと知識の再コンテクスト化の現象を重視することになります。テキストの意味がコンテクストによって与えられると考えれば、伝達の理念と解釈学との関係が明らかになります。その点では、『百科全書』は複数の観点を含んでいて、ガダマーが提起したテキストの真理という問題に通じるのです。

本講義は博士後期課程科目の「テキスト布置解釈学」講義（原論・各論）への導入として博士前期課程の受講生を対象とし、二人の担当教員によるワークショップ形式で開講しています。毎回、テキストの布置構造や解釈学に関して一つのテーマを設定し、担当教員がそれぞれの専門の観点から論点整理を行い、その後受講生とともに全体で質疑応答を行っています。

### ■ 加納 修

西洋中世における *textus* という言葉の意味の変遷に基づいて、同時代のテキスト概念を明確にしたのち、西洋中世初期から伝わる法典や証書を素材として、テキスト布置と解釈学の問題を検討した。文芸批評や哲学の分野で練り上げられた「テキスト」概念を基盤として、歴史研究で用いる史料、しかも法的な性格を有する史料を検討することは、意味ある作業に見えないかもしれない。しかし、そもそも新たなテキスト概念が、テキストの不安定さを証明する西洋中世の写本研究に支えられる部分も大きいがゆえに、豊かな成果をもたらす可能性を持っている。たとえば、『サリカ法典』は同時に複数のヴァージョンで流通しており、ひとつではなく複数のテキスト布置とそれを規定する社会的環境の所産として考察されなければならない。またフランク時代の証書を、たとえばパラテキストの観点からその序文、あるいは冒頭定式や終末定式を考察することで、他のジャンルのテキスト（聖書）や他の媒体（貨幣）との関係がいつそう明瞭になり、証書を法史料として読まないことで、逆にこの時期の法史料の性格に近づくことが可能となる。



## グローバル COE ワークショップ

西洋中世 (ラテン語)・近世フランス古文書学ワークショップ

### Lire les Manuscrits occidentaux, du IV<sup>e</sup> au du XVIII<sup>e</sup> siècle

西洋の手稿記録 (4世紀から18世紀) を読む

グローバル COE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」プロジェクトの招きで、ソルボンヌ高等研究院名誉教授ジャン＝ルー・ルメートル博士と、夫人でパリ第1大学教授ニコル・ルメートル博士が来日し、2月20日から3日間にわたり、講義と実習指導を行った。

ジャン＝ルー・ルメートル博士は西洋中世の宗教史の専門家、とくにネクロロギウムと呼ばれる過去帳系統史料についての世界的な権威である。若くしてフランス学士院の要請で、全国各地の教会、修道院、文書館に散在する中世過去帳の写本の悉皆調査をして目録を完成させたが、数万点に及ぶ調査を37歳で完成させ大型判2巻本の出版は、学界を驚嘆させた。

ニコル・ルメートル博士は近世史の専門家、とくに17世紀の南フランスの農村社会を、細密な「ミクロストリア」の手法で明らかにした『書記と占師』は、忘れられたある

ジャン＝ルー・ルメートル 博士・ニコル・ルメートル 教授

2012年2月20日(月)～22日(水) 13時30分～18時



いは未刊の農民の記録を発掘して、これを縦横に駆使した傑作である。

両氏は3日間にわたり、午後の前半をジャン＝ルー先生がそれぞれ「ローマ大文字体からカロリング小文字体へ」、「カロリング小文字体から人文主義者書体へ」、「証書記録論」と題して、また午後の後半にはニコル先生が「印刷バトルド体から個人流の草書体へ (1)(2)(3)」と題して、講義と実習を行った。参加者はラテン語文書や17世紀の手書き本の写真版を、指名されて解読することを求められ、大学院生だけでなく、教員もまたひと昔まえの留学の折の苦労を追体験するという極めて意義深い3日間であった。

(文責：佐藤彰一)



## グローバル COE 講演会

ジャン・ガスク 教授

パリ第4ソルボンヌ大学

2012年3月16日(金) 14時～

### Egyptian hagiography and Religious History: open meaning; hidden meaning

聖人伝と宗教史——明かされたメッセージ、隠されたメッセージ

パリ第4大学教授で、パピルス学の専門家として国際的に著名なジャン・ガスク教授が、グローバル COE の招聘で3月14日から21日の日程で来日し、パピルス文書のみならず、氏が最近とくに関心をもち研究の対象にしている東方教会のローマ期、ポスト・ローマ期の聖人伝記録についてグローバル COE のメンバーと意見交換を行い、3月16日には「聖人伝と宗教史——明かされたメッセージ、隠されたメッセージ」と題する公開講演を英語で行った。

エジプトを含む後の初期ビザンツ世界の聖人伝研究は、わが国では西方ローマ世界のそれに比してやや立ち後れの感が否めない。ガスク教授はキリスト教聖人伝の東西に共通する社会経済史、歴史地理、宗教地誌などの分野での史料価値について一通り概観したあと、「聖ピオニオス伝」



を素材に、旧約聖書の伝統とラジカルな訣別をしたマルキオン派の礼拝慣行の独自性を掘り下げることで、一見矛盾する記述の真の意味を解き明かしたミシェル・タルディユの卓越した業績を紹介し、ついで4世紀のエジプト殉教者フィレアスの伝記を素材にして、表面的な主題から真の主題を剔出し、また311年に殉教したアレクサンドリア主教ペテロの複数の土地の巡歴崇敬から、その遺骸の一部がそれぞれ崇敬の場所に埋葬された経緯を明らかにし、そして7世紀初頭イエルサレム主教で聖人伝作者ソフロニオスが書き記した「奇跡譚」からは、その中で語られる少年が、教会の祭壇に献納された子供であった事実を、旧約聖書のサムエルの故事を手がかりに解き明かしてみせるといふ、深い学殖に裏打ちされ、多彩な解釈学的視点をはらむ興味

尽きない内容の講演をおこなった。小説という文学ジャンルの源泉の一つが、聖人伝文学であったとする議論も、ま

ことにむべなるかなとの感を強く懐かされた。

(文責：佐藤彰一)

## h オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラムでは21世紀 COE プログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催してきました。毎月1回水曜日の18時から、名古屋国際センタービルに開設したグローバル COE オフィスで、「テキスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当者の先生やその他の先生がレクチャーしてきました。全42回のレクチャーの題目と要旨は、Web サイトでお知らせしています。本号では2011年10月以降に開催した2回の要旨を紹介します。

第41回

### ロマンティック・パロディーとテキスト布置

2011年10月19日(金)  
18時—

大石和欣 准教授 (名古屋大学大学院文学研究科・英文学)

ジェラルド・ジュネットによれば、パロディとは、ある旋律を移調させたものであり、その限りにおいて戯作やパステイシュもまたパロディの大きな範疇の中に包摂される。しかし、パロディの定義と様式はそれでは説明しきれない超テキスト的力学が働いている。

イギリス・ロマン主義時代に J・H・レノルズが書いた詩『ピーター・ベル—抒情民謡一篇』(1819年)はそうしたパロディの問題点を提示する。同時代のウィリアム・ワーズワスの詩『ピーター・ベル』のパロディとして認知されているが、実際には本歌を読むことなく書かれ、その一週間前に出版された。表題がパラテキスト性を有し、複数の先行テキストとの間テキスト性を保ちながらイペルテキストとして最大限に機能している。このパロディが好評を

博したために、ワーズワスの本歌までも未曾有の売れ行きを見せ、さらには P・B・シェリーによる諷刺詩『ピーター・ベル三世』も誘発される。同じ年にはワーズワスに対する複数の諷刺詩やパロディが流行したし、そもそもロマン主義の時代は、パロディと諷刺の時代である。

こうしたパロディの増殖には、本歌とパロディ、さらには読者・批評家との間にテキストの解釈学的循環のプロセスが含まれ、その結果として混沌状態として受容されていたロマン主義時代のテキスト布置がある。ジェローム・J・マガンの『ロマン主義イデオロギー』(1983年)における指摘を待つまでもなく、ロマン主義時代のパロディは繊細かつ明瞭にワーズワスが体现するロマン主義イデオロギーへの批判と抵抗を試みていたのである。

第42回

### 言語とテキストの解釈学

2011年11月30日(金)  
18時—

松澤和宏 教授 (名古屋大学大学院文学研究科・フランス文学)

解釈学的理解の第一の特徴として挙げられることは、対象の裡に自分を移し入れて追体験的に理解しようとするという姿勢である。小林秀雄が挙げる亡くなった子供を思い起こす母親という有名な例が如実に示しているように、歴史をかけがえのない思い出として捉えようとするのは、デルタイの解釈学的理解と重なる主体的な把握である。小林秀雄に見られる客観主義的な方法論主義への批判は、言語とテキストをコミュニケーションの手段や自律的存在としてではなく、解釈学的経験の場として捉えようとする点で今日でもなお評価に十分値するが、解釈者の現在と過去との二重性を立体的に捉えるには至っていない。ガダマーの哲学的解釈学は、テキスト解釈が起源の文脈と解釈者の背負っている文脈との間の対話という観点を導入し

たが、テキストを起源の文脈に還元してしまっているために、媒介者としてのテキストの独自の境地(エレメント)が十分には究明されていないように思われる。テキストの二重性を、文学的文献学や法解釈学と歴史学との間に存在する差異に注目しながら考察し、歴史学が過去の客観主義的復元を目指すように見えながらも、最終的には解釈対象と解釈主体との連続性、同質性が想定されていることを、ガダマーの論述に即しながら明らかにした。そしてテキスト解釈の一例としてフローベール『感情教育』の一節の解釈を試み、最後に解釈学的なテキスト経験が個人を超えた伝承の共同体に参与する実践でもあるとするガダマーの伝承の共同体論の意義と問題点を考察した。



## グローバル COE 研究員 ブリーフィング ⑭

グローバル COE のポスト・ドクトラル研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテキスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバル COE オフィスを中心に研究活動を行ってきました。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実しました。

### 金銀珠 ● 「髪の長さ女」「髪長さ女」「女の髪長さ」構造の特徴と役割分担——平安時代語を対象に——

現代日本語で「髪の長い人」と表現される連体修飾構造は、平安時代の日本語では「髪の長さ女」「髪長さ女」「女の髪長さ」のような言い方で表現される可能性がある。現代語の「髪の長い人」のように助詞「の」が主語を表す表現は、これまでの研究では「髪が長い人」のように助詞「が」が主語を表す連体修飾表現とよく比較され、歴史的研究においても両者を比較した論文は数多く見られる。これは、歴史的にみれば、助詞「が」がその勢力を拡大し、「の」が担当していた領域を侵食してきているという言語事実からすれば、当然で必要不可欠なプロセスでもある。しかし、このような研究上の流れは歴史的な変化の勝者を知っている現代人の視点から得ら

れたものである。視点を変えて、例えば、平安時代の日本語話者の意識の中で、「髪の長さ人」が「髪が長さ人」だけを意識して使用されていたのかと言えば、そこには大いに疑問が残る。それは、上記のように平安時代の人にとって「髪の長さ女」は「髪が長さ女」のような構造だけではなく「髪長さ女」「女の髪長さ」のような構造でも表すことが出来たからである。本発表では、このような従来の研究上の問題点を踏まえて、同時代の言語体系に注目し、上記の似通った三つの構造がどのような特徴を持ち、どのような役割分担が行われていたのかについて考察した。

## 海外出張報告

### 明朝中国における西洋古典の受容に関する調査……………小川正廣

2012年1月4日～11日の旅程で中国・南京・鎮江、上海の大学・図書館・博物館を訪問し、明朝末期17世紀初頭におけるカトリック・イエズス会宣教師マテオ・リッチと中国の学者・政治家徐光啓の邂逅からユークリッド『原論』の漢訳『幾何原本』の刊行（1607年）までの資料を調査した。まずリッチが徐と最初に出会ったのは南京であり、それは1600年のことだったと伝えられるが、その事情については不明な点が多く、南京図書館と南京大学図書館では、『当利瑪竇遭遇中国』『利瑪竇与中西文化交流』などの文献を閲覧できたことは有益であった。次にイエズス会と徐との交流全般と『幾何原本』の成立に関しては、とりわけ上海・徐家匯にある徐光啓陳列館が重要な情報を提供してくれた。当館には一昨秋にも立ち寄ったが、そのときは残念ながら閉館していた。今回は GCOE の総括論集と Hersetec に『幾何原本』について二つの論文の掲載を予定しており、幸いにも入館して調査することができたことは、拙論のデータの最終的裏づけと論旨の検証に役立った。さらに徐家匯では、上海図書館附属・徐家匯蔵書楼（Xujiahui Bibliotheca, 清朝時代に創設）や土山湾博物館も訪問し、名古屋大学の上海事務所にも近いこの地区が、中国ひいては東アジアの科学と文化の近代化の最先端の場所であったことをあらためて確認した。徐家匯とはそもそも、農学者でもあった徐光啓が開墾して彼の子孫が住んだ土地だったのであり、そうした歴史的事情は、徐光啓という人物がギリシア古典数学の受容のみならず中国の

科学と文化の西洋化全般に果たした基礎的貢献の大きさを物語るものであるということを再認識できた。

ちなみに中国では一般に英語が通じにくい、徐光啓の陵墓のある光啓公園近くの土山湾博物館内を案内してくれた館員は英語だけでなくフランス語もじつに流暢に話した。徐家匯の神学校では清朝末期の教育家馬相伯の時代からフランス語はラテン語とともに熱心に教えられたが、その西洋語教育の影響が現代まで続いている様子にも、中国史上ずば抜けて開明的だった徐光啓に始まる徐家匯地区独特の文化的伝統を垣間見る思いがした。

(事業推進担当者・西洋古典学)



『幾何原本』と『勾股義』[ピュタゴラスの定理考]の刻本  
徐光啓陳列館にて



大学院学生海外派遣事業

- 2007年度 吉田早悠里, マンジョの文化人類的研究
鈴木球子, マルキ・ド・サド『美徳の不幸』生成論的研究
三好俊徳, 真福寺の歴史テキスト—宗論としての仏教史叙述
2008年度 玉田沙織, U. C. パークレー校三井文庫旧蔵本の研究
森田剛光, 祭りファーローを取り巻くさまざまなテキストの調査研究
笠井俊和, 17・18世紀における北米植民地の船乗りと西インド貿易
福岡麻子, エルフリーデ・イエリネク初期作品における言語の複数性の意義
2009年度 竹田伸一, 墮罪物語の蛇のテキストと図像の変遷
山下英夫, 『ボヴァリー夫人』における怪物性について
2010年度 神山歩未, マオリの木彫り彫刻に関する解釈学的研究—ニュージールランド都市部におけるマラエとマオリコミュニティの事例から
竹田伸一, 蛇の図像の変遷に関する海外継続調査
市川 彰, メソアメリカ考古学史再検討のための基礎的研究
2011年度 百合草真理子, イザベラ・デステのストゥディオ—空間と絵画テキスト—図像プログラムに関する調査研究

論文賞

- 2007年度 小久保嘉紀, 日本中世札札の成立の契機
阿部 伸, 批判のコンテクスト—エウリピデス『オレステス』におけるアポロン
2008年度 深津周太, 狂言テキストにおける感動詞「シシ申」の歴史的研究
福岡麻子, 初期エルフリーデ・イエリネクにおける言語の複数性—1970-80年代 女性の書く主体を解体する試みの一例
山下英夫, Monstruosité dans Madame Bovary de Gustave Flaubert. Étude génétique
2009年度 エミリ・ポルドナヴ, Japonisme, de l'art à la littérature : Pour une présentation des concepts et phénomènes d'influence
笠井俊和, English Smuggling Activities in the Official and Private Documents: The "Spanish Trade" and the Logwood Trade from Jamaica in the Late Seventeenth and Early Eighteenth Centuries
2010年度 玉田沙織, Formation of a Commentary in Nineteenth Century Japan: Motoori Scholar Nakayama Umashi's Approach to Gosen Wakashū
2011年度 佐々木 稔, L'apparition du Spleen moderne : les représentations du chien et de la mort

オープンレクチャー

- 第1回 佐藤彰一, 封建制概念のテキスト論的脱構築のために
第2回 釘貫 亨, 日本人と漢字
第3回 Pierre-Louis Rey (Université Paris III), Les Trois contes, un intermède dans l'œuvre de Flaubert ?
第4回 古尾谷知浩, 文字互と知識
第5回 Lawrence Michael O'Toole (Murdoch University), MULTIMODALITY: ENGAGING WITH PAINTING Botticelli - Canaletto - Rembrandt - Seurat
第6回 小川正廣, アテネ国立考古学博物館にみるギリシア神話
第7回 阿部泰郎, 宗教図像テキスト複合としての聖徳太子給伝
第8回 松澤和宏, ソシユールと解釈学
第9回 宮川 繁 (マサチューセッツ工科大学), 画像文化
第10回 宮地朝子, 日本語形式名詞の文法変化—「ほか」を一例に
第11回 加納 修, メロヴィング朝の国王証書の伝来状況をめぐって
第12回 クレール・フォヴェルグ, ティドロと18世紀における解釈
第13回 Yvan Leclerc (Université de Rouen), Pourquoi sommes-nous tous flaubertiens ?
第14回 長尾伸一, 啓蒙時代の自然と人間—「科学革命」と宗教のかかわりをめぐって
第15回 高橋 亨, 源氏物語と後宮文化
第16回 佐藤彰一, アリストテレス哲学の「発見」と中世初期ヨーロッパ
第17回 池内 敏, 19世紀における竹島・松島認識
第18回 金山弥平, プラトンと文字の功罪
第19回 鎌田隆行, 作品の解釈から生成へ—P. バイヤールの問題提起をめぐって
第20回 大石和欣, 18世紀末のイングランドと増殖するチャリティーの言説
第21回 重見晋也, もう一つのテキスト布置構造—ポール・リクールの場合
第22回 Vincent Vivès (Université de Provence), Romanticism: History, Philosophy

- and aesthetics
第23回 加納 修, Festuca は知行の授与の際に用いられたのか—一家臣制の象徴儀礼をめぐると一つの試論
第24回 Zane Goebel, Televised signs, reflexivity and authentic ethnic personhood in Indonesia
第25回 Laurent Bibard (ESSEC), Sur la problématique de la fin de l'Histoire
第26回 佐藤彰一, 哲学的解釈学からテキスト解釈学へ—歴史テキストを軸にして
第27回 釘貫 亨, 近代日本語研究と教養主義の系譜
第28回 松澤和宏, テキスト論と解釈学
第29回 クレール・フォヴェルグ, 『百科全書』に解釈学はあるか
第30回 古尾谷知浩, 日本古代の戸籍・計帳と死亡人の把握
第31回 高橋 亨, 十二類歌合絵について
第32回 小川正廣, 中国における西洋古典の受容—徐光啓と馬相伯をめぐって
第33回 森際康友, 法解釈を論ず
第34回 阿部泰郎, 「霊地」のテキスト学試論—「生身」の聖徳太子と太子遺跡寺院のテキスト体系
第35回 金山弥平, テキストとしての感情と解釈としてのギリシア哲学
第36回 宮地朝子, 山田孝雄『日本文法論』のテキスト布置
第37回 池内 敏, 竹島問題におけるサンフランシスコ条約等の解釈をめぐって
第38回 重見晋也, ミシェル・フーコー「知の考古学」における布置概念
第39回 釘貫 亨, 仮名遣いと古代日本語
第40回 佐藤彰一, 時間・事件・テキスト—解釈学の挑戦
第41回 大石和欣, ロマンティック・パロディ—とテキスト布置
第42回 松澤和宏, 言語とテキストの解釈学

GCOE 講演会

- 2007年度
Lawrence Michael O'Toole (Murdoch Univ.)
FUNCTIONAL THEORIES OF LANGUAGE: The background to Systemic Functional Linguistics Sentence → Exchange → Poem / A TRI-FUNCTIONAL VIEW OF ARCHITECTURE: Domestic - Sydney Opera House - Noyori Conference Centre / ADVERTISING: WORDS AND IMAGES - Picasso and Cannon Copiers
2008年度
宮川 繁 (マサチューセッツ工科大学教授)
一致 I / 文の構造 / 一致 II
Jacques Dalarun (CNRS)
The Tapestry of Bayeux as Historical Document / Robert of Arbrissel and the Religious Life in the Age of Gregorian Reform / The Correspondence of Abelard and Eloise / Maternal Government according to an Autography of Francis of Assisi / The Umbrian Legend: the New Legend of Francis of Assisi / The Relations Masculin/Feminin in the Relationship between Francis and Clare of Assisi
戸田 聡 (一橋大学非常勤講師)
カイサリアのエウセビオスとシリア語キリスト教文学
Alain Dierkens (Université Libre de Bruxelles)
Childéric (†481) et Clovis (†511). Histoire, archéologie et production de documents écrits.
2009年度
Greg Clingham (Bucknell University)
Literature, Ends, and the Possibility of Happiness
Dominique Barthélemy (Université Paris-Sorbonne / Paris IV)
The Beginnings of European Chivalry (12th century) / Noble Warriors of Japan and France in the 12th and 13th centuries / The Civil War in tenth century France / The Chivalric Transformation / Knights and Devils / Towards a Reappraisal of the "Peace of God"
Irene Rosier-Catach (CNRS, Université Paris VII)
Intentions, conventions, performativity: medieval discussions about sacramental formulas and oaths
George Hughes (former professor at the University of Tokyo)
England and Englishness: The Modern Problem of an English Identity
Vincent Vivès (Université de Provence)
Mallarmé, Verlaine, Rimbaud, Lautréamont : la révolution du langage poétique au XIXe siècle en France

- Paul Fouracre (The University of Manchester)  
The 'Life of St Wilfrid's' account of Wilfrid on the Continent. Should we believe it?
- Yi-long Huang (National Tsing Hua University)  
Cultural interaction between East and West
- 2010年度
- Stephen Harrison (University of Oxford)  
Victorianising Vergil
- Gisèle Séginger (Université Paris-Est)  
Le sentiment religieux dans la littérature française du XIX<sup>e</sup> siècle
- Ruey-Lin Chang (Université de Strasbourg)  
Reconstitution de papyrus grecs fragmentaires : trois rouleaux fiscaux d'époque romaine conservés à Strasbourg
- Philippe Walter (Université Stendhal/Grenoble 3)  
Essai d'herméneutique d'une rumeur historique au Moyen Age : l'inceste de Charlemagne et de sa soeur
- Claude Pierre Perez (Université de Provence)  
« Qu'est-ce que cela veut dire ? » La littérature comme herméneutique de Baudelaire à Proust/Imagination et interprétation. La critique de l'herméneutique de Rimbaud à Beckett
- Lucia Dolce (SOAS, University of London)  
Ritual Embryology in the Japanese Tantric Tradition: Another Mediaeval Soteriological Shift?

#### 2011年度

- 宮川 繁 (マサチューセッツ工科大学教授)  
歴史と画像 : Visualizing Cultures
- Jean Gasco (Université Paris-Sorbonne/Paris IV)  
Egyptian hagiography and Religious History: open meaning; hidden meaning

#### GCOE Workshop ● Lire les manuscrits occidentaux, du IV<sup>e</sup> au XVIII<sup>e</sup> siècle

- Jean-Loup Lemaître (EPHE)  
De la Capitale à la caroline/ Les documents d'archives/ De la caroline à l'humanistique
- Nicole Lemaître (Université Paris 1)  
De la Bâtarde imprimée à la cursive personnelle

#### 国際研究集会

- 第1回 ● 2007年9月7日～9日  
英語歴史テキストの文献学的・文法論的研究/Philological and Grammatical Studies of English Historical Texts, 名古屋大学 [Masa-chiyo AMANO, Michiko OGURA, Masayuki OHKADO eds., *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts*, Peter Lang, 2008]
- 第2回 ● 2007年12月14日～16日  
バルザック、フローベール—作品の生成と解釈の問題/Balzac, Flaubert. La genèse de l'œuvre et la question de l'interprétation, 名古屋大学 [松澤和宏編, 『バルザック、フローベール—作品の生成と解釈の問題』, 2008/Kazuhiro MATSUZAWA éd., *Balzac, Flaubert. La genèse de l'œuvre et la question de l'interprétation*, 2009]
- 第3回 ● 2008年2月9日～10日  
テキスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る/Identity in Text Interpretation and Everyday Life, 名古屋大学 [Masa-chiyo AMANO, Michael O'TOOLE, Zane GOEBEL, Shinya SHIGEMI, SONG Wei eds., *Identity in Text Interpretation and Everyday Life*, 2008]
- 第4回 ● 2008年7月19日～21日  
日本における宗教テキストの諸位相と統辞法/The Global Stature of Japanese Religious Texts: Aspects of Textuality and Syntactic Methodology, 名古屋大学 [阿部泰郎編, 『日本における宗教テキストの諸位相と統辞法』, 2008]
- 第5回 ● 2009年3月5日～7日  
知のテキスト化/La mise en texte des savoirs, パリ東大学・国立図書館リシュリユー館 (フランス) [Kazuhiro MATSUZAWA et Gisèle SÉGINGER eds., *La mise en texte des savoirs*, Presses Universitaires de Strasbourg, 2010]
- 第6回 ● 2009年3月7日～8日  
歴史テキストの解釈学: 針路、解釈実践、新たな諸問題/Herméneutique du texte d'histoire : orientation, interprétation et questions nouvelles, 東京国際フォーラム [佐藤彰一編, 『歴史テキストの解釈学—針路、解釈実践、新たな諸問題』, 2009]

- 第7回 ● 2009年8月29日・2009年9月4日～6日  
Sixth Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL6)  
(Special panel), Aspects of Japanese Grammar and Its Theories, 名古屋大学 [Hiroki MAEZAWA and Azusa YOKOGOSHI eds., *Proceedings of WAFL6, Workshop on Altaic Formal Linguistics*, MITWPL, 2011]
- 第8回 ● 2009年9月3日～5日  
日本語テキストの歴史的軌跡—解釈・再コンテキスト化・布置/Historical Trajectories of Japanese Texts: Interpretation, Recontextualization and Configuration, プラハ・カレル大学 (チェコ) [高橋亨編, 『日本語テキストの歴史的軌跡—解釈・再コンテキスト化・布置』, 2010]
- 第9回 ● 2010年9月9日～11日  
ことばに向かう日本の学知—テキスト解釈の集積としての学知/Japanese Academic Knowledge Aiming for Language, 名古屋大学 [釘貫亨・宮地朝子編, 『ことばに向かう日本の学知』, ひつじ書房, 2011]
- 第10回 ● 2010年10月1日～2日  
Interpretation by Another Name: The Uses of Legal Texts in the Age of Enlightenment/ 解釈、そのまたの名は—啓蒙期における法テキストの用法, 高師師範学校 (パリ・フランス) [Yasutomo MORIGIWA, Michael STOLLEIS, Jean-Louis HALPERIN eds., *Interpretation of Law in the Age of Enlightenment*, Springer, 2011]  
(Round Table), 2010年9月27日  
Rechtsfindung in the Context of Justice/ 司法における法判断、または具体的正義への法テキスト解釈, ハイデルベルク大学 (ドイツ)
- 第11回 ● 2010年12月10日～11日  
文献学と解釈学の間/Between Philology and Hermeneutics / Entre la philologie et l'herméneutique, 名古屋大学 [松澤和宏編, 『文献学と解釈学の間』, 2011]
- 第12回 ● 2011年9月1日～2日  
歴史におけるテキスト布置/Configuration du texte en histoire, 名古屋大学 [加納修編, 『歴史におけるテキスト布置』, 2012]
- 第13回 ● 2011年12月9日～11日  
哲学的解釈学からテキストの解釈学へ/De l'herméneutique philosophique à l'herméneutique du texte, 名古屋大学 [松澤和宏編, 『哲学的解釈学からテキスト解釈学へ』, 2012]
- 共同開催分 ● 2011年3月10日～12日  
Enseigner la littérature à l'université aujourd'hui, (プロヴァンス大学・フランス)  
[*Enseigner la littérature à l'université aujourd'hui*, publication numérique au site Fabula]

#### 刊行物

- 『テキストの解釈学』 (松澤和宏編, 水声社, 2012)
- 『HERSETEC』 Vol.1 No.1, No.2 ~ Vol.5 No.1, No.2 (全10号)
- 『GCOE NEWSLETTER』 No.1 ~ No.15
- 『外部評価報告書』 (2010), 『外部評価報告書』 (2012)

#### 研究員の就職

- 平野克典 (名古屋大学大学院文学研究科・GCOE特任助教)
- 横越 梓 (名古屋工業大学大学院工業研究科・准教授)
- 西村善矢 (名城大学人間学部・准教授)
- 永田道弘 (大分県立芸術文化短期大学・専任講師)
- 品川大輔 (香川大学経済学部地域社会システム学科・専任講師)
- 杉山奈生子 (愛知産業大学大学院造形学研究科・准教授)
- 小澤 実 (立教大学文学部・准教授)
- 谷部真吾 (名古屋大学大学院文学研究科・助教)
- 深津周太 (愛知淑徳大学全学日本語教育部門・講師)

2007年10月より始まり、名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEプログラムの活動をお知らせしてきたこの『GCOE NEWSLETTER』も、プログラムの終了に伴い第15号が最終号となります。  
寄稿していただいた方々をはじめとして、印刷を担当した株式会社あるむのの皆様、そして何よりも編集委員会のメンバーに心から感謝する次第です。



## 国立大学法人 名古屋大学 グローバルCOEプログラム テキスト布置の解釈学的研究と教育

発行日 2012年3月31日

発行 名古屋大学大学院文学研究科

No.15

名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOE事務局  
〒464-8601 名古屋市中村区不老町 TEL/FAX 052-747-6461

名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEオフィス  
〒450-0001 名古屋市中村区那古野一丁目47番1号 名古屋国際センタービル15F  
TEL 052-587-1710 FAX 052-587-1709